

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金 菊熙

金菊熙氏の博士論文「第 2 言語音声習得における知覚と生成の関係 ―成人韓国語話者の日本語習得に見られる外国人訛りを中心に―」の審査結果について報告する。

本論文は、成人学習者の第 2 言語 (L2) 音声能力について、L2 学習経験が L2 音声の知覚と生成にどのような変化をもたらすのかを解明しようとしたものである。具体的には、成人韓国語話者の L2 日本語音声習得を取り上げ、日本語音声習得における知覚と生成の関係をいくつかの実験を行うことによって明らかにしようとしている。従来の研究では、分節音と超分節音のいずれを対象とするかによって、L2 音声の知覚と生成の関係について、相反する結論が出されたりしている。そのため、本論文では日本語 (L2) の音節単位であるひらがな音に関する知覚と生成の実験、さらに日本語文章の知覚と生成に関する実験を行い、2 つのレベルにおける知覚と生成の関係の検証を試みている。

本論文は 5 章からなる。第 1 章ではまず、成人学習者の L2 習得に見られる音声上の特徴を「外国人訛り」と総称し、その定義および原因、研究の方法論などに関する先行研究を検討している。

続く第 2 章では、成人の L2 音声習得をめぐる様々な先行研究についてその理論的背景を概観した。その際、まず「言語外要因」として「習得開始年齢」の問題を取り上げ、いわゆる L2 習得における「年齢効果」について、子供と大人の音声学習をめぐる主な仮説やモデルについてまとめている。続いて「言語内要因」として、音声の知覚と生成それぞれのプロセスについて触れたのち、L2 音声の知覚と生成の関係について先行研究の見解をまとめた。さらに、本稿の実験対象である韓国語と日本語の音声特徴をまとめたうえで、成人韓国語話者の L2 日本語音声習得に関する先行研究を概観している。

第 3 章では、成人韓国語 L1 話者を被験者とし、ひらがな音を材料とした実験 I の結果を分析し、L2 音声の知覚と生成の関係を検証した。実験 I では「ひらがな音の聞き分けテスト」と「ひらがな音の発話テスト」を行った。「ひらがな音の聞き分けテスト」では、目標言語の使用国で長期の滞在経験を持つ被験者グループ (JSL) と L1 使用環境でのみ L2 学習を行った被験者グループ (JFL) の間で L2 音声の聞き分け能力に違いがあるかどうかを調べた。続く「ひらがな音の発話テスト」では、聞き分けテストで用いられたひらがな音の一部を発話材料 (音声データ) とし、被験者が「1 人で発音したとき」と、「母語話者を真似て発音したとき」において、L2 音声の生成能力に違いがあるかどうかを調べた。

第 4 章では、同じく成人韓国語 L1 話者 JSL と JFL の 2 グループを被験者とし、L2 文章を材料とした実験 II を行った結果から、L2 音声の知覚と生成の関係を検証した。実験 II では、会話体の文章を「1 人で発音したとき」と「母語話者を真似て発音したとき」

の2種類の発話データを設け、ネイティブスピーカー(NS)の聞き手による「外国人訛り」の程度判断を行い、その結果をもとに分析を行った。

2つの実験の結果をまとめると、以下のことが明らかになった。①成人学習者にはL2音声の特徴を感知して模倣できる能力が備わっていると考えられる。②L2経験の多寡にかかわらず、成人L2学習者にとって、L1に存在しない新しいL2音の習得は極めて困難である。③L2経験に伴い、新しいL2音の聞き分け能力はある程度改善していくと考えられるが、生成については、L2経験以外の学習者要因が関わる可能性が高い。このため、④聞き分け可能な音は、必ずしも生成が可能であるとは言えない。さらに、⑤目標言語において音声的に対立する音を区分して生成できた場合でも、L1では異音としてのみ扱われない場合、必ずしもその音に対する聞き分け能力があるとは言いがたい。なお、⑥L2経験の効果は、ひらがな音よりもL2文章発話において顕著であると考えられる。ただし、⑦成人学習者のL2音声は、母語話者の発話とは明白に区分され異なる。

最後の第5章では、2つの実験から得られた考察の結果をまとめ、結論としている。

本論文のもっとも大きな特徴は、JSLとJFLというL2経験の異なる2つのグループに対して実験を行った点、さらに、L2音声の習得を音節単位と文章レベルに分けて分析を行った点にあり、これら多角的な実験と分析によって、成人学習者のL2音の知覚と生成の関係をより深く明らかにすることができている。その結果、音声学習能力そのものは一生を通じて損なわれないというFlege(1993)の音声学習モデル(SLM)の見解と一致する部分はあるものの、新しいL2音声の知覚は学習初期には困難であるが、L2経験を積むことによって成人学習者は新しいL2音声に相応しいカテゴリーを形成し、結果的に知覚・生成ともに改善されていくというSLMの見解には、留保が必要であることを指摘している。

このように、従来にない新たな視点で考察分析を行った点において、本論文は第2言語教育、日本語教育の分野で高く評価される論文であると考えられる。なお、審査において、知覚と生成の状況は明らかにしているが、習得のメカニズムまでは明らかにできていないこと、語レベルでの分析が行われていないこと、L2経験で滞在年数のみが重要視され、他の社会的要因や学習者の個性についての分析が不足していることなど、今後検討すべき課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。